



「たんぼにまつわる話」32.

—「自然からの贈り物」—

岡山市 十川 巡一

たんぼのまわりは私にとっても恩恵があったところなのでした。春になると休みはもちろんのこと、学校から帰るとチリ紙に塩を包んで、たんぼを目指して行きました。たんぼは山の斜面にある為、棚田になっていました。石垣やあぜみちにシャシゴ（イタドリ）がはえるのです。太くて30cmぐらいの長さを取り、皮をむいて塩を少しつけて食べていました。その美味しかったこと!？（タラノキもその頃は沢山あり、大久保の子は三年うずきと呼んで近寄らなかった）。

毎年春が待ち遠しくてたまりませんでした。レンゲ畑に寝ころんだりあぜに咲いたタンポポで笛やメガネを作って遊びました。雨が降った後はよく水が流れるので一人でたんぼのみぞを石や土でせき止めて「ダムジャー」と言いながら作って遊びました（この時、泥でおにぎりの作り方を覚えた）。水の流れ出るところをこしらえて、オドリコソウの花の蜜を吸い、茎で水車を作ってクルクルと回るのをジーと見ていました。そんなことでも楽しかったのですねえ!…子供の頃は。

たんぼのまわりには、木の実やイチゴの仲間があり、6月初旬には赤くて柔らかい実を付けたクサイチゴが沢山あったので、取っては食べ、取っては食べ、その甘い事! 小学校へ行く途中にも竹やぶの傍にあり、よく手のひらに集めて口にほうばっていました。また、山の斜面にはナガバモミジイチゴやナワシログミ、たんぼの傍にはクワの実、6月中旬～下旬には石垣でナワシロイチゴの赤い実が「おいで、おいで」と手招き

をするのです。気がつくと、もう食べていました。クサイチゴと比べるとすこしスッパイけれど美味しいイチゴです。

ある時、ヘビイチゴは「食べられるのかなあ?」と思い、口に入れて咬んでみるとカスカスするだけで味もなかったので食べたのはその一度きりでした。

秋になると、ちゃんかご（竹で編んだ籠）を持って、また、たんぼを目指して行きました。たんぼの傍の林にはアベマキやアラカシなどの木にアケビやミツバアケビのつるが巻き付いて水色の実や赤紫の実がぶら下がっているのです。取る前に近くに実をつけているヤマナスビ（ナツハゼ）やノブドウ（エビヅル）を口にほうばりながら、木に登り夢中で取り、かごの中に詰め込み、持って帰って妹達に分けてやり、一緒に食べました（とても甘いのです）。口にほうばり種だけプップーと吹き出して食べるのです。

林の中にはクリもあり、秋もまた待ち遠しい季節でした（自然がとても美味しい時代でした）。

大久保の子供達はノブドウとかヤマブドウと呼んでいましたが、エビヅルだったのです。本当のノブドウは別があり、青色や白・紫などの綺麗な実を同時につけるブドウによく似たつる性の植物です。



故 洋画家の青木正春先生に頂いた「山菜図」



楽しい秋のアケビ取り